パソコン通信「ダイヤネットワーク」

（１）事業の目的

Ａ．生きがいづくりを「サラリーマンＯＢの社会参加」から捉え、現役時代に培った知識、技術、人脈等を活用し、または、退職準備として取得したものを活用し、社会に役立つ仕事を通しての社会参加を取り上げる。

Ｂ．企業組織から離脱したサラリーマンＯＢが社会参加する上で必要な情報ツールのあり方を研究する。

（２）実施方法

Ａ．ニフティのパソコン通信サービスメニューであるプライベートフォーラムを確保(契約名：ダイヤネットワーク）し、これを情報ネットワークツールとして、当ネットワークに各テーマの会議室を設け、研究活動の情況、情報提供の場とする他、データライブラリー等機能活用を計る。

Ｂ．サラリーマンＯＢに有用と思われるテーマを幾つか設定し、参加者（ネットワーク会員）が自主運営する形でグループ活動する。

（３）平成９年度の活動実績

Ａ．会員募集

参加会員として企業退職高齢者及び５５歳以上の現役と人生設計アドバイザー、シニアライフアドバイザー等の有資格者を対象にしたが、スタート時の会員は、平成７～８年実施した「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティーの形成・運営モデル事業」に参加した高齢社会リサーチモニター２６名であった。この為、当初想定した参加者層の確保を狙いとして会員募集を行った。この間２名死去による退会があり、年度末の会員は５６名となった。

表１　参加者募集情況

募集ルート	新規入会者数	備　考
財団職員が参加者に直接勧誘	6	
既会員が個人的に勧誘	7	
ＯＢグループがパソコン集団で勉強後入会	１２	１グループが実施
既会員が所属ＯＢ会総会で紹介	5	１ＯＢ会で実施
既会員が所属ＯＢ会々報に紹介記事掲載	0	３ＯＢ会誌で実施
社内ＬＡＮに紹介記事掲載	2	１社で実施
社内報へ紹介記事掲載	0	１社で実施
当財団機関誌に紹介記事掲載	0	
計	３２	

Ｂ．テーマ活動

会員総会等の機会を捉え、会員への研究活動テーマの働きかけを行ったが、会議室への意見掲示技術等パソコン通信をうまく使いこなせない等の意見が多く、テーマ活動は平成１０年度考えることとし、代わって、パソコン通信技術習得のため、会員の自主運営による「パソコン自主研修会」を行うこととした。

この様に、パソコン技術習得を必要とする背景に、パソコン通信ソフトの目まぐるしいバージョンアップがあると思われる。特に高齢になってから修得した初心者にとってのバージョンアップは、わずかな変化にも対応しきれないといった不安をあたえているようだ。

「パソコン通信をツールとした企業退職高齢者の生きがいづくりーダイヤネットワーク活動」 活動報告および活動記録

1．テーマ

パソコン通信をツールとした企業退職高齢者の生きがいづくり

2．期　間

平成９年４月～平成１１年１２月

3．体　制

（1）研究体制

財団関係者

平成９年４月～平成１０年３月
若林　健市
高島　雅夫
藤倉　雄

平成１０年４月～平成１１年１２月
山本　精四郎
藤倉　雄

参加者

当財団の賛助会員会社ＯＢを中心とする７４人
名簿（平成１１年１２月現在）－２９頁参照

（2）運営体制

当研究は、平成７年１０月から平成９年３月の間実施した「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティの形成・運営モデル事業」（財団法人長寿社会開発センターの助成事業／同事業終了報告書－平成９年４月１０日）を引き継ぐ形で、当モデル事業に参加した２６人でスタートした。その後随時参加希望があり、平成１１年９月には７４人参加となった。

パソコン通信ツールは、当財団がニフティ株式会社の提供するプライベートフォーラム（財団愛称：ダイヤネットワーク）を法人契約し、同フォーラムのメニューの中で、電子会議室、データライブラリーを情報提供及び情報交換の場として活用した。

参加者は、各自がニフティ株式会社とプロバイダー契約をした上で、ダイヤネットワーク会員として登録、各自のパソコンを通じて意見、情報などをジャンル別に設けた電子会議室やデータライブラリーに掲載し、また、電子会議室を介してイベント開催情報を流し、小集団活動を展開した。個々には電子メールの交換が行われた。

4．情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティの形成・運営モデル事業の概要

当研究は、モデル事業の後を承けた形でスタートしたこともあり、特に初期段階の平成９年４月から概ね一年間、モデル事業を通して構築したコミュニティ運営の影響を多分に承けた形での展開となった。

ここでは、当研究の特に初期段階で多大な影響を与えた「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティの形成・運営事業」についてその概要を述べる。

（1）企業退職高齢者の社会参加問題

わが国は長寿国といわれるようになって久しい。しかし、特に企業退職高齢者にとって、人生 80 年、定年後 20 年という長期間を如何に生きるかは非常に大きな問題である。

企業に長年勤めて定年退職することは「退職」を境に生活環境が一変することを意味する。給料・賞与の収入に依存していた経済的基盤の変更はいうに及ばず、会社とのつながりが切れてしまう。また、今までの仕事に替わる「やること」を見つけられないことから、生きる目的を見失うということも起こりかねない。

三菱グループ 29 社の定年退職者に退職後の生活と生きがいについて「アンケート調査」をした結果、退職後の心配の第一はやはり健康問題で、50 ％以上の人が不安を持っている。現実的には 75 ％ぐらいの人が元気に過ごしている。そこでそういう人達を対象に“生きがい”についてもう少し掘り下げてみると、つまるところは「社会参加」だという回答が返ってくる。

なんらかの社会参加を求める元気な高齢者たちの“生きがい”が今や重要な社会問題になっている。

（2）パソコン通信に寄せる期待と課題

パソコン通信は、居ながらにして離れた場所にいる多くの人達と気軽にコミュニケーションができる手段として優れたスキルである。それは、企業退職高齢者にとっても、社会とのつながりを確保するのに有用であると期待される。しかし、企業退職高齢者はパソコンが今日ほど普及していない時代に活躍してきた人達であり、果たしてパソコン通信を使いこなせるかどうかが問題である。

（3）モデル事業への参加者

当モデル事業への参加者は、当財団が運営していた高齢社会リサーチモニター制度のメンバーで、財団主催のパソコン体験会に参加した３８人の内、当モデル事業への参加を希望した全員２６人で、２６人中２５人が全くパソコンを使ったことのない、平均年齢６８歳の企業退職高齢者である。

（4）パソコン技術教育

モデル事業では、パソコン技術教育から着手した。教育は、各自が自宅に設置したパソコンを使って、通信教育により習得するという方式で行った。

この教育システムは、明生システムサービス株式会社がヘルプデスク付き通信教育「パソコン家庭教授」のノウハウを結集して構築したもので、パソコンの基本操作、ワープロソフトによる文章作成、およびパソコン通信の３コースについて、各コース解説の集合教育に続くカリキュラムに沿った自宅学習、随時電話・ファクシミリでの質疑応答、それでも分からない時に教育施設を訪問し指導を受けるという組み合わせで、全コース４ケ月間を目途に履修するもので、参加者の全員が、結果的には所定の全教育コースを履修できた。

しかし、教育後に展開したパソコン通信技術を駆使

したコミュニティの形成・運営に移行した段階で、通信ソフトのバージョンアップに伴うソフトのインストールや新バージョンの使い方、或いはプリンターの導入、プリンタードライバーの組み込み、条件設定など、教育段階では教わらなかったことを各自独力で対処せざるを得ない状況が発生し、独力ではうまく対応できずモデル事業から脱退を申し出る人や、パソコンが起動しなくなるなどのトラブルに悩まされる人が続出した。

インストール後の条件設定に手こずったケース、パソコンが動かなくなったなどのケースの中には、参加者自身で問題解決できないため財団のモデル事業推進担当者が各自宅に赴き技術支援せざるを得ない状況もあった。モデル事業期間１年半の間に、参加者２６人中１０人の自宅を訪問し技術支援をした。参加者の半数近くが自己解決できない問題を抱えたことは、コミュニティ形成にも支障を来す問題である。これを解決した経験は、「所定の初級者教育履修後のフォロー体制の重要性」を示唆する結果となった。

（５）コミュニティの形成・運営

コミュニティづくりでは、パソコン技術を習得した２６人全員がパソコン通信ネットワークに参加する形で展開した。当初は、企業の現役社員に相当する財団職員が種々仕掛けを考え、コミュニティづくりに持ち込もうとしたがあまり旨くいかないまま時間だけが過ぎていった。スタートして２ケ月位経って、参加者の中から「現役がＯＢのことを考えても旨くいきませんよ、企業ＯＢの立場から、自分たちでコミュニティづくりを考えてみます」という意見がだされ、電子掲示板、および電子会議室への発言を通じてコミュニティづくりがスタートした。

コミュニティづくりの原点は、なんと云っても参加者が共通の関心事を何に求めるかである。関心のないことがらテーマでは、義理でつきあったとしてもコミュニティには進展しないと考えられた。そこで、３ヶ月間、特にテーマを設けず、電子掲示板に参加者が思いつくままを自由に掲載することにした。３ケ月経過後、電子掲示板で話題が集中したものをジャンル別に分類し、各電子会議室名とした。また、参加者のほぼ全員がパソコン通信の初級者であり、アクセスし意見を掲載できるようになるまでには、それなりの練習をする場が欲しいという要望から、練習コーナーや質問コーナー等を設けた。どんな話題であれ「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティの形成・運営モデル事業」を進める橋頭堡ができた訳で、以後参加者はそれぞれのテーマに沿った話題提供に絞り、電子会議室を通じた情報交換、また、各々が電子メールで意見交換に取組むことになった。

モデル事業の最終段階である平成８年８月から平成９年３月の期間意見掲載のあった電子会議室およびその活用状況は以下の通りである。

会議室名	意見掲載状況
パソコンどう活かす会	３８　件
ボランティア	９
介護	５
ＯＢ会	５
歴史	９
井戸端会議（ﾉﾝﾀｲﾄﾙ）	３３
旅行	６２
コンピュータ	９
練習コーナー	２０
小さな疑問・大きな疑問（質問）	４３

（６）自主活動の芽生え

参加者の意見をくみ入れた形でコミュニティづくりがスタートしたこともあり、参加者自身でコミュニティづくり、および活性化に関わるアイデアが出され、その実施に当たっても参加者の中から自発的に世話人をかってでる人などが現れた。

現役時代に通勤していた路線沿線に居住している参加者同士が親睦の場を持つ目的から鉄道路線沿線の会（愛称）「小田急線友会」が第一に産声をあげた。より多くの参加者が電子会議室へ意見掲載し、活性化を図ることを目的に、コンピュータ・パソコン経験者が中心となり「パソコン自主研究会」（現在のＤＯＣＯＡＫＩの前身）がこの時期誕生した。その他「囲碁会」「歩こう会」等がこれに続いた。

（７）コミュニティの更なる展開

パソコン通信による情報ネットワークの活用は、アクセス費用を伴うものである。モデル事業では、アクセス時間及び頻度に依存する従量料金制を採用したこともあり、参加者の多くは月々のアクセス費用をチェックしつつネットワークに参加する状況で、アクセス頻度は１人当たり月平均２８.１回、一回当たり３.８分であった。

計画当初、コミュニティの活性度評価に参加者のアクセス頻度をバロメーターとして考えていたが、上記の結果であった。しかし、これでコミュニティが沈滞したわけでは決してなく、自主活動の場は、参加者同士が直接会う機会でもあり、これがコミュニティの展開に非常に大きな役割を果たした。開催に当たっては、開催案内や結果報告などに情報ネットワークを活用した。

イベント開催の案内文作成はオフラインで行うとしても、参加者への伝達では通信回線接続と同時に、ほんの数秒で会員全員に同時発信できること（この仕組みを専門用語ではないが「同時通報電子メール」と仮に呼称する）、或いは電子掲示板に掲載できること、その間の費用は高々１０円位である。日常的通信手段といえる電話、ファクシミリ、或いは郵送にかかる手間や費用に比べれば、遙かに優れた情報伝達手段だということは分かっているが、それを平均６８歳の、初めてパソコン通信を体験した企業退職高齢者が見事に使って、コミュニティは更に活性化することとなった。

５．当研究－ダイヤネットワークの展開

（１）モデル事業から当研究へ

当研究では、企業退職高齢者が生きがいづくりとして何を考え、何を求めているのか。また、それらを視野に、自分自身に役立つ情報とは何かを自ら参加する活動を通して提案することを目標とし、テーマを「パソコン通信をツールとした企業退職高齢者の生きがいづくり」としてスタートした。

しかし、当研究の、特にスタートして概ね一年間は、「企業ＯＢの立場から、自分たちでコミュニティづくりを考えてみます」ということで始動したモデル事業の後を引き継ぐ形で、モデル事業に参加した２６人が会員ということもあり、コミュニティ活動や、パソコン通信技術の補習教育が話題の中心であった。

これらの活動の間にも、自主活動で集まる機会等をとらえて参加者、財団担当者間で「生きがいづくり」テーマ活動への移行策について話合い、結果、２年目に入って、新規入会者も含む会員を構成員とする「運営委員会」「研究会」組織をつくり「生きがいづくり」に焦点をあてた活動へと展開した。その後、この組織を中心に当研究期間終了まで活動した。

１）新たな参加者・会員増

生きがいづくりテーマ遂行には会員増、並びに健康生きがいづくりアドバイザーや生活設計アドバイザー等生きがいづくりに関わる有資格者の参加が必要だという考えで、当財団の賛助会員各社の人事や総務などを訪問し入会者の紹介を打診した。一般社員では、社内報で紹介されたケースで１人の入会者を得たが、この紹介ルートでは入会者の多くを期待できなかった。一方、ある企業では、社員教育や転職などに関わりのある人事担当者の理解のもと、当研究活動を専門の立場から支援する考えで適任者を紹介されることがあった。また、アドバイザーとして活躍している人の参加を得る等に加え、会員自身が所属するＯＢ会の総会開催時にチラシを配布し、更に、知人、友人を勧誘する形で入会者が増え、現在 74 人（他２人死亡退会）になってる。

２）ダイヤネットワーク活動

２６人からスタートした会員数は、会員も参加して積極的に集客活動を展開した結果、概ね１年後にはほゞ倍の人数になった。自主活動など集まる機会をとらえて話合いを続けてきたことから、会員にも生きがいづくりテーマへの取組み機運が熟してきた。丁度その頃、モデル事業からの引きずりで、コミュニティ活動の延長、趣味の集まりといった声が聞こえる時期にさしかかっていた。

そこで、当初目標とした生きがいづくり活動への移行を計るべく運営委員会をつくり取組の具体策を検討した結果、これまでの自主活動に加え「運営委員会」「３つのテーマ研究会活動」を中心に、「賛助会員各社の協力を得た各種イベント・勉強会等の開催」「国際高齢者年ＮＧＯ活動への協力参加」等実施するに至った。

①運営委員会

会員の９割以上が賛助会員各社のＯＢであり、運営委員はその中から、一社に集中しないよう人選しお願いした。運営委員会は月一回頻度で開催し、ネットワーク運営全体に関わる課題を検討すると共に、各委員は３つの研究会の何れかに属し、研究会活動の中心的役割を担っている。また、「自分自身も含む企業退職高齢者に役立つ情報とは何か」に視点をおいて、各種イベント・勉強会の企画・運営などを担当し、その実施に当たっては、賛助会員各社の協力も得ている。

運営委員会議事録、諸活動状況・結果報告等は、電子会議室に掲載し、全会員が何時でも、何処でも同じ情報入手が可能という状況である。

時には、全会員に同時通報電子メールで情報提供し、会員の受信状況を把握し、アクセスが無い人には電話で近況を伺い、運営委員会で対策を検討するなども行っている。

［付記］

何らかのトラブルからパソコン通信に支障を来している会員がいる時、その人の自宅近くに技術支援ができる人がいるケースでは、問題解決のみならず、それをキッカケに新たなコミュニティの輪が拡がる等副次的効果が得られている。

（解説）ニフティ社のＩＤ番号取得者同士は、ニフティマネージャーで発信した電子メールを相手が何時受信したか、未受信か確認出来る仕組みになっている。

②研究会

生きがいづくり活動につて、他のグループでは何を考え、何をしているのか、自分たちは何をどうするのかという課題を運営委員会に投げかけ検討した結果、前者には「調査研究会」、後者では「シニア・ハッピーライフ研究会」及び「お楽しみ編集室」の３グループ活動とし、各研究会名の電子会議室を新設し、会員にも参加を呼びかけ、活動結果を当該電子会議室へ掲載することとした。

各研究会の活動結果は、全て活動記録集に収載しているが、ここではその概要について以下に記載する。

＊調査研究会

「ダイヤネットワークでは、従来からAARP米退職者協会の活動について、種々な調査を行ってきたが、平成１０年６月の運営委員会で今後の活動方針が討議された。その結果、生産的社会参加に焦点を絞り、国内外の高齢者団体を訪問、インターネット等により実状を調査し、問題点を抽出し、今後のあるべき姿について検討、提言を行う事となり、新たに調査研究会が設置された。

ダイヤネットワークの活動テーマには、企業経験者の高齢化社会への対応が課題の一つと考えられるが、高齢者が「生涯現役」をめざし、自ら積極的に自主、自立し、地域社会と共に相互扶助のもとに２１世紀の高齢化社会システムを構築して行くことであると思われる。

各々の詳細はその都度ダイヤネットワークの電子会議室に掲載するが、今回はこれらの要旨と流れについて述べる。特にAARPは高齢者団体の元祖であり、代表的存在であるので、詳述したい。」という出だしで報告された活動結果は、インターネットから情報収集し、国内の団体には会員が訪問調査を行ったものである。以下に調査した団体を示す。

①米退職者協会ーAARP

②米国の高齢者行政

③海外の高齢者団体とネット

　カナダ、イギリス他

④北欧の福祉

⑤国内の高齢者団体

　東京高齢者共同組合、WAC,メロウソサイアティ、三井ボランティアネットワーク

⑥世界の高齢者ネット

＊シニア・ハッピーライフ研究会

「AARP（米国退職者協会）のRetiredを引退したでなく移行したTreansitedとする姿勢、 *To Serve Not To Be Served* の信条に共鳴。その日本版を作ろうと志を持ち、取り敢えずはダイヤネットワークに如何に魅力を持たせ拡大展開を図って行くかをテーマに、研究課題を「２１世紀のシニアライフをハッピーに過ごすための研究」として取り組むこととした。」という出だしで取り組んだ研究の対象（分野）は以下の通りである。

①定年後のシニア向けに

ⅰ．生活を支える制度やサービスの特典（医療・福祉・年金・税金・雇用等）

ⅱ．生活を豊かにするサービスの特典（旅行・レジャー・教養・娯楽等）

ⅲ．社会参加で生きがいを（パソコン学習情報とネットワークづくり）

②退職準備を考えているシニア向けに

ⅰ．退職前のプランづくり事例集（出来るだけ会員から募集）

ⅱ．退職時の手続き等失敗事例とうまくいった事例集（会員から募集）

＊お楽しみ編集室

主として電子会議室「井戸端会議室」に会員が掲載した記事を話題毎に分類・編集し、当研究活動の活動記録集の原稿とすべく纏めることを活動の中心としたもので、分類は以下の通りである。なお、電子会議室「井戸端会議室」はモデル事業の時から、ノンタイトルセクションとしてあったものに、趣味的要素の濃いもの、例えば、旅や歴史などを一カ所にまとめたものである。

分　類

Ａ　歴史
　Ａ１　三菱小史
　Ａ２　歴史
　Ａ３　郷土
Ｂ　文芸
　Ｂ１　俳句
　Ｂ２　映画・音楽・演劇
　Ｂ３　能面
　Ｂ４　書籍・書評

分　類

Ｃ　旅・登山・散策
　Ｃ１　国外
　Ｃ２　国内
　Ｃ３　登山・散策
Ｄ　自然
　Ｄ１　園芸
　Ｄ２　鳥
　Ｄ３　虫
Ｅ　生活
　Ｅ１　健康
　Ｅ２　食

③賛助会員会社の協力

③－１　各種イベント・勉強会

ⅰ．三菱歴史探訪会

第一回三菱歴史探訪会に参加した会員が電子会議室に報告した記事の冒頭部分を以下に紹介する。

「現在の三菱各社は、戦後、夫々別個の独立した企業として、発足し、所期奉公、処事光明の共通理念のもとに、社会、経済の発展に貢献すべく事業を進めているが、三菱関係ゆかりの場所を探訪し、又そこに収められた当時の公開史料を見学、閲覧し、その時に思いを馳せ、三菱の源流を探る歴史探訪会が立ち上がった。その第一回として、湯島界隈の

1.岩崎久弥茅町本邸

2.三菱史料館（三菱経済研究所付属施設 ）

をダイヤネットワーク会員１７人、財団２人の１９人で、平成１１年８月２５日（水）午後１時１０分、丸の内線本郷３丁目駅に集合した。３０度Ｃを越える暑さだった。（以下略）」

第二回は熱海・陽和洞（旧岩崎別邸）を探訪した。「ダイヤネットワーク会員１０人、財団２人の１２人が１１月２６日熱海駅に集合し、汗ばむ程の天候に恵まれ、駅前から約５００ｍ歩き、急な坂道を登り、（中略）まるで絵にかかれた様な竹林で（中略）「陽和洞」の銘板がかかげられた隧道をすぎると、急勾配の青緑色の大きな瀬戸瓦葺きの屋根、外壁の裾周りは真鶴産の六ケ村石の野石積、桧模様をみる様な鉄筋コンクリート造り二階建て（４２０坪）の洋館が現れる。（以下略）

これら三菱関係ゆかりの場所探訪に先だつ手配の段階で、賛助会員会社の関係窓口にお世話いただき実現できたものもある。三菱企業ＯＢが主体のダイヤネットワーク会員にとって人気の高いイベントである。

［付記］

この辺りと次の商品勉強会、及び製品販売等は、グループ企業とそのＯＢのネットワークという関係から実現できたものと考えられる。グループ企業単位での企業退職高齢者ネットワーク構築の存在理由の一つにあげられる。

ⅱ．商品勉強会
ー遺言・相続・快適空間づくりー

ダイヤネットワーク会員は、概ね当財団の賛助会員

各社である三菱２９社のＯＢである。この様な会員が現役時代に所属した会社に働きかけ、現役社員が講師となり、会社が取り扱っている商品について、当ネットワーク会員を対象に商品勉強会を開催した。

初回は、三菱信託銀行（株）の社員に講師をお願いし、当ネットワーク会員３０人に対し、相続・遺言等について勉強会を開催した。

二回目は旭硝子㈱で快適空間づくりと題する講義をしていただいた。

③－２　製品販売

現役時代は、会社や関連会社のサービス部門を通して商品購入や情報収集が可能なことであっても、多くの場合ＯＢにはそのような特典に浴する機会が無い。

そこで、当研究会の参加者は、概ね当財団の賛助会員会社のＯＢであることを考慮し、会員の雄志から出身会社に特にお願いし、ダイヤネットワーク会員に便宜供与を試みた。

当研究期間中、パソコン、ＭＯ等パソコン周辺機器、デジタルカメラなど購入に便宜を図っていただく機会があり、会員に好評であった。

④自主活動

④－１　ダイヤ小田急線友会（ＤＯＳ会）

平成７年１０月より着手した「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティの形成・運営モデル事業」に参加した人たちの内、小田急沿線在住者８人が集い、平成８年６月パソコン学習を兼ね気軽に話し合うコミュニティとして発足したのが始まりである。その後平成１１年２月メンバーも２２人になり、名称を「ＤＯＳ会（小田急線友会）」から「ダイヤ小田急線友会（ＤＯＳ）」にし再スタートしている。主な活動に「囲碁会」「施設見学会」「ハイキング」「ゆとり研究会活動」等がある。

④－２　ＤＯＣＯＫＡＩ

当研究がスタートしてまもなく、パソコン通信ソフトのバージョンアップやＷｉｎｄｏｗｓが3.1から９５になるなど、それまで修得したパソコン技術では対応しにくい状況となり、参加者の中には技術的に付いていけず、そのままでは脱落しかねないといったこと、電子会議室への意見掲載が滞る等の問題が派生した。

当初はダイヤ高齢社会研究財団の狭い会議室を使った勉強会を開催していたが、参加者が増え、また、会を重ねていく中で、技術レベルに個人差が目立つようになったため、レベル別に回数を増やして欲しいなどの要望がでてきた。狭い会議室での対応が難しい時期にさしかかった時、ニフティ株式会社から「セミナールーム」を使用する便宜を提供していただくこととなり、以後月１回、同セミナールームで参加者の中から講師役をお願いし、自主的勉強会を続けている。

パソコン通信が出来る環境下での勉強は大変な効果があり、ネットワーク活性化の源になっている。

④－３　囲碁会

ＤＯＳ会の活動として誕生したのが始まりだが、当初から、囲碁会への参加はＤＯＳ会メンバー限定ではなくモデル事業参加者に広く参加を呼びかける形で運営してきた。ＤＯＳ会が再スタートしたのに伴い平成１１年５月、ＤＯＳ会から独立し、「ダイヤネット囲碁会」として再スタートした。

④－４　連雀会

中央沿線居住者を中心としたパソコン勉強会である。モデル事業に参加した２６人の中で唯１人コンピュータ経験者であった村瀬さんの自宅を集会所よろしく集まり、パソコン勉強半分、懇親半分の気楽な会を開いたのが始まりである。以後インターネット、デジタルカメラの導入、ケーブルテレビ回線によるパソコン通信など、パソコンをとりまく技術の進展に遅れることなく技術紹介、研鑽を重ねている。

④－５　ＤＯＤＯ会

一企業の同期会ＯＢが「熟年から始めるパソコン勉強会」としてスタートしたのが始まりである。所定の教育コース履修後、当勉強会メンバーに「ダイヤネットワーク」活動を紹介し、メンバー全員が当ネットワークに参加することになり、以後ＤＯＣＯＫＡＩとの交流が深まり、今日に至った。

④－６　富士見会

ＤＯＤＯ会メンバーの中で、向山さんがハードの故障による勉強の遅れで困っていた。連雀会主催者の村瀬さんが支援に駆けつけ、序でに勉強の遅れを取り戻すべく向山さんの自宅を勉強会場として、周囲の人も巻き込む形で始めたのが事始めである。

なお、向山さんが故人となられたため、活動記録集では、ＤＯＤＯ会で一緒に勉強された大前さんに富士見会の紹介をお願いした。

④－７　東海道五十三次を歩く

パソコン勉強会に集まった折り、健脚の深沢さんが富士登頂したお祝いに巌さんが「広重・東海道五十三次」図録を贈ったのに、周囲の人のケシカケ？もあり、弥次喜多よろしく当の二人を主人公に平成９年８月スタートしてから平成１１年１２月１日京三条でパソコン仲間が見守る中「ケシカケ人？」「弥次喜多の二人」相まみえるまでの道中記を電子会議室に掲載した。

（２）電子会議室運営

「パソコン通信をツールとした企業退職高齢者の生きがいづくり」活動は、往々にして、パソコン通信そのものへの参加が全てかのように周囲の人たちから言われることもあった。しかし、実際そこに参加した人々の言動は、後述する「企業退職高齢者の生きがいづ

くり－参加者の声－」からも読みとれる通り、パソコン通信を情報提供、交換の手段として活用しつつ、年齢を感じさせないほど闊達な行動力のもと、様々な場面に積極的に参加し、そこにそれぞれにとって意義のある「生きがい」を見いだしたことを示している。

以下に、「生きがいの母胎」とも形容される電子会議室の概要を紹介する。また、これら電子会議室に掲載されたものの内、主なものは「活動記録集」に収録した。

１）電子会議室「調査研究会」

研究会活動の一つである「調査研究会」活動の成果を発表する場として開設し、当該研究会メンバーが収集した情報の開示を主体に活用した。

２）電子会議室「シニア・ハッピーライフ研究会」

定年後のシニア、及び退職準備を考えているシニアという切り口からテーマ追求を行うこととしたので、電子会議室も同テーマに添う形で２つの会議室を開設した。前者はシニアの生活や生きがいに関わる情報収集とその開示、後者は参加者の体験事例を基にこれから退職する人にも参考になる情報提供が中心になっている。

３）電子会議室「おたのしみ編集室」

電子会議室「井戸端会議室」に掲載された話題は多岐にわたっている。情報として活用するために、また、「活動記録集」編集の上にも話題別に整理する必要があったことから、井戸端会議室掲載記事の分類、整理基準及び編集技術の検討など、関係者が情報交換する場として活用した。

４）電子会議室「生き生き創生広場」

研究テーマには、「企業退職高齢者の社会参加支援」も含まれているという認識で、一つはシニア・ハッピーライフ研究会が取りくんだ退職準備を考えているシニア向け情報提供がある。更に、ダイヤネットワーク参加者自身が生産的社会参加を企て、活動展開するものに、直接的に働きかけ、支援していこうとの考えで開設したのが当会議室である。

５）電子会議室「社会参加コーナー」

会員自ら体験した社会参加の報告や会員にとって有用と思われる社会参加関連情報を会員雄志が自発的に掲載する場として活用した。

６）電子会議室「イベントコーナー」

会員が参加しているボランティア活動の開催案内、当財団主催の講演会開催案内、後述する「国際高齢者年ＮＧＯ活動－エイジングメッセ in 早稲田」参加協力の呼びかけなど、ダイヤネットワーク活動の内或いは外の活動で、会員に有用であり、刺激になりと思われるイベント開催や実施状況報告などを行った。

７）電子会議室「交流コーナー」

会員の(慶)弔に関わること、囲碁会など自主活動の開催案内や結果報告などに活用した。

８）電子会議室「井戸端会議室」

特に話題、テーマを限定せず、会員の思いつくままを自由に掲載する場として、あたかも井戸端で四方山話に花が咲くがごとくを期待しものである。結果は当会議室に対する発言が最も多く、話題も多岐に亘った。発言は「お楽しみ編集室」担当メンバーが編集作業を進め、活動記録集に収録した。

９）電子会議室「掲示板」

運営委員会報告の掲載をはじめとして、お知らせ的なものの掲載が主体である。運営委員会報告を後で読み返してみると、ダイヤネットワーク取組の準備段階から具体的活動への移行など、興味ある内容となっている。

１０）電子会議室「パソコン活用術」

取り上げられた話題は、大きく分けて３つのジャンルからなっている。一つはインターネット、ホームページの利用情報の提供であり、次に、パソコンハード或いはソフトのトラブル解消法、ハードの改良体験談など、第三は、デジタルカメラなど新たな話題を取り上げたもの等である。

１１）電子会議室「練習室」

電子会議室に意見掲載するには、ある程度慣れるまでの練習期間が必要だという意見が多く、特に始めての人が、まとまった記事でなくても掲載してみることのできる会議室として開設した。その後パソコン技術勉強会「ＤＯＣＯＫＡＩ」の席上、参加者が試し掲載するコーナーと活用された。

(3) イベント参加－国際高齢者年ＮＧＯ活動 －エイジングメッセｉｎ早稲田－

平成１１年は、国連決議による「国際高齢者年」であり、記念事業として「自発する人生、アクティブ・エイジングが日本を動かす」をテーマに、９月１５日早稲田大学キャンパスで「エイジングメッセ'９９in早稲田」が開催された。

当財団はテーマを「みんなで創るアクティブ・エイジング」とし、企業退職高齢者のパソコン・ミニ体験－インターネット・パソコン通信による情報交換－を行った。

当財団の要請により、ダイヤネットワーク会員８人がこれに協力参加した。他に、三菱電機㈱のパソコンと要員、ニコン㈱からデジカメと要員、ＮＴＴからＰＨＳの無償供与、ニフティ㈱から配布用パソコン通信ソフトの提供を受けた。

参加した会員はパソコン操作により、インターネットへのアクセスなどを通して来訪者とコミュニティを持ち好評裏に参加できた。

（４）考察

１）企業退職高齢者とパソコン通信
－ダイヤネットワーク活動から－

①調査研究活動の結果得られた情報・知識
－ダイヤネットワークの存在意義・特徴など－

ダイヤネットワーク会員は、７４人のうち７２人までが当財団の賛助会員である三菱グループ２９社の現役或いは退職高齢者である。会員から「参加者同士、誰でも、入会したその日からでも親近感のもてる仲間」としてお付き合いができるのはやはり同一グループのＯＢだから、という声をよく聞いた。また、当財団が会員の協力を得て、「企業退職高齢者の生きがいづくり」といったテーマのもと展開してきた研究活動は、企業退職高齢者として当事者でもある会員自身が、自分たち自身の問題として、自身で考え行動し、成果を電子会議室に開示することを通して、更には、自主活動の場に参加し、会員同士喜びを共有する機会にもなった。

一社のＯＢ会などでは、退職した後でも現役時代の上下関係がそのまま持ち込まれ、結果として、役職にあった人は役職組ＯＢ会、一般社員とは別々などといった運営がされていると聞くが、ダイヤネットワークは数社のＯＢが混在する環境下にあり、現役時代の職位、職階が持ち込まれる弊害はなかった。むしろ、人生の先輩・後輩、或いは、能力に応じた役割分担の中で運営されたことは特筆に値する。

更に、フォーラム運営では、運営に当たる事務局と参加者は、提供するものと利用するものという具合に立場が違うと一般に言われている。ダイヤネットワークでは、モデル事業の時、既に環境が出来たのであるが、現役職員が企業退職高齢者の生きがいづくりを後押しはしても、会員自ら行動を起こし、方向を見いだしていった。モデル事業から当研究へ移行した概ね一年間は、生きがいづくり活動が具体的に見えてこない期間で、趣味だ・遊びだとい声も聞こえてきた時期でもあったが、運営委員会を組織し数ヶ月の検討の後、活動方向が見えてきた段階から（この間のことは活動記録集・電子会議室「掲示板」参照）企業退職高齢者のための生きがいを、企業退職高齢者自身、自らの手で引き寄せた活動であった。

②シニア・ハッピーライフ研究会活動・その他の活動を通して得られた知見－高齢者にとって提供して欲しい情報のあり方など

当財団では、「健康」「経済」「生きがい」を３本柱とした研究に取り組んでいる。その中で、当研究はパソコン通信をツールとした「生きがい」づくりという切り口からスタートした。

スタート当初は、パソコン技術習得に多くの関心がよせられた結果、パソコン通信そのものが目的であるがごとき印象を与えた時期もあった。その時期は、丁度 Windows が３.１から９５へと激変したのに伴い、通信ソフトなどでも大きな変化をした時期である。しかし、こういった技術的変革の嵐が収まるにつれ、ダイヤネットワーク会員にとって、パソコン通信手段が電話やファクシミリに優るとも劣らない「普段着の通信手段」として定着してきた。

普段着の通信手段としてパソコン通信を日常生活に受け入れる段階では、《パソコン通信をツールとした「生きがい」》という「生きがい」に限定した考えが、もはや通用しない時期にきたことを意味する。

ダイヤネットワーク及びその周辺で飛び交った情報は「健康」「経済」「生きがい」の全てにわたるものであった。ここで考えないといけないのは、情報の質や性格（分類）である。例えば、公的介護保険や金融関連情報、健康問題などは企業退職高齢者にとって共通の関心事であろう。一方「三菱歴史探訪」「商品勉強会など会社情報」などはグループの人たちが特に関心を寄せる話題と思われる。また、旅行や登山、囲碁など小グループ活動の場を持つことも重要である。更に、情報は与えられる情報のみならず、参加者自身が発信する情報の場も必要だ。

高齢者にとって提供して欲しい、或いは自ら発信したい情報は多岐にわたっている。それらの情報提供或いは交換の場を如何に組み立てるか、その仕組みづくりが重要課題である。共通話題と企業グループや小グループの話題の棲み分けとその運営、相互の連携といった構図が見えてくる。

③コミュニティとしての意義

パソコン通信は、文字に限らず、絵（写真）、音声（パソコン電話）、動画など送受信し、その場で見るにとどまらず、印刷物として取り出せるなど、電話やファクシミリでは出来なかった可能性をもたらした。

ダイヤネットワーク会員の中には、遠隔地に赴任している息子・娘家族と両親（老親）の家族全員がパソコン通信に参加し、交流を深めている家族がいる。また、会員同士疑似家族？と見まごう位にコミュニティが形成された例もある。

シニアネッラーニングセンターの中でも、最大規模のジョージア州サバナ市のシニアネットを主宰するギャレット博士は、シニアネット会員の健康状態につて疫学的調査をした結果、パソコン通信に参加している高齢者はそうでない高齢者より健康的であると指摘している。ダイヤネットワークとしても関心ある話題であり、これは特に調査はしていないが、確かにＤＯＣＯＫＡＩに参加している会員は闊達として、新進的なことに興味をしめし、心身ともに若いといえる。

ここまでくると、改めてコミュニティ形成手段としての意義を論ずる必要もないくらいであるが、ここまでくる道のりの中で何が必要だったかを振り返り、今後の課題を見いだすことに意義がある。

ここでは、支援体制・機器／ソフト開発の方向に限定して問題を取り上げる。

初心者向けパソコン教育は、高齢者にも目が向けられつつあり、パソコン入門時の支援体制は確保されそ

うである。しかし、厄介なのは、パソコンを日常的に使用している中で、突然トラブルに見舞われることである。

ハードやソフトの故障なら、それはそれでメーカーやショップがバックアップしてくれるだろうが、例えば、パスワード入力時に大文字、小文字を違えると通信不能に陥るのである。パスワード入力では＊＊＊＊の表示で、文字確認出来ない仕組みになっている。電話問合わせに対応していると、当の本人（初心者）は大文字で入力したつもりでいる。しかし、実際は小文字入力になっているという具合である。

今のパソコンの多くは、どのパソコンでも、どのソフトでも共通であるはずの機能が、例えば、日本語入力と半角英数字の切替などの操作がパソコンやソフトによって違うのである。表示もまちまちである。

高齢者にやさしいパソコンの開発という話題は、往々にして、単機能パソコンの開発などに結論がいきそうであるが、購入者はいろいろ見比べたあげく、高機能パソコンを買い求めるそうである。高齢者も同じである。

最近の機種はＵＳＢ接続が主流になり、周辺機器と接続時の悩みから解放されたのは大きな救いである。全てのパソコンやソフトに共通する操作部分は、どれをもってきても同じやり方といった基準作りをお願いしたい。

現状では、初級者教育後の継続的な支援体制確保が是非とも必要である。初心者はどのような誤操作をするのか、高齢者はどうか、など対処した経験がトラブル解決のヒントを与えてくれるケースが多々ある。

こういった支援体制づくりは、ボランティアに期待が寄せられがちだが、新たなニーズであり、有料の仕事として育成していく意識が利用する側にも、提供する側にも必要ではなかろうか。

２）企業退職高齢者の生きがいづくり
－参加者の声－

情報ネットワークによる企業退職高齢者のコミュニティの形成・モデル事業では、企業現役が提案する仕掛けではうまくいかず、結局は企業退職高齢者である参加者が、企業ＯＢの立場でコミュニティ形成に自ら知恵を出し、行動した。これに続いた当研究では、コミュニティの更なる展開とともに、参加者自身が、運営委員会、研究会活動を通して、自分自身に、また他の会員にとって役立つ情報とは何かを探求した。

こうした活動の結果として、企業退職高齢者の生きがいづくりとしての評価はどうだったのか。ここを論ずる前に、モデル事業の時、現役の提案ではうまくいかなかったことを思い起こすべきかもしれない。つまり、企業現役が想定している「企業退職高齢者の生きがい」と企業退職高齢者のそれと基準が違うようである。

そこに留意し、ここでは「企業退職高齢者の生きがい」についてダイヤネットワークに参加した会員の声を直接伝え、その声の中から読者自身にくみ取っていただくこととする。

①会員からよせられた小論文
ダイヤネットワークに参加して何がどうかわったか
－良かったこと、悪かったこと－

会員に、電子会議室を通じて小論文提出を呼びかけた結果を以下に収録する。（平成１１年）

発言者：村瀬　敏哉
題名　：事務局からのお願い

会員からの小論文募集の依頼がシスオペから有りましたので早速下記文章をメールしました。大変お粗末なものですが、これから書かれる方がこれを見て書きやすくなるのではないかと思い転載いたします。尚これと同様にこの趣旨の文章はシスオペ宛のメールと同時に会議室にも載せられては如何でしょうか。

又シスオペからも連絡有りますように、今後の運営も考えてなんでも結構ですので、多数の方がこのフォーラムの会議室を利用されることを期待致します。

記

”好きこそものの上手なれ”と云いますが人間何かに興味を持って初めて本気になってそれに挑戦しものにするのではないでしょうか？

数年前に財団が老人力に対してパソコンのカリキュラムを始めたときに二十数名の会員が手を挙げ参加しました。キーボードを触ることからはじめて文字の入力からメールの受発信まで一応大半の会員は卒業しました。しかし内容が一部年寄り向きで無かったこと、更にはＯＳが windows ３．１から９５に進化し、又インターネットに就いては殆どふれて居らなかった。ＤＤＤの会議室も余り馴染みがなかった等のため、補習の意味も含め有志で自主研修会を頻繁に開き技術を磨きました。更に旧化成の十数名のグループ更には口コミによる会員の増加もありダイヤネットワークの会員数は現在は八十名を越えるグループにまで発展しております。

コンピューターはこれからの時代には不可欠のツールだと思います。何でも出来ますが、何せ機械で融通が利きません。”．”と”、”が違っても云うことをききません。更に取扱説明書、解説の本も特殊の言葉が多く解り難いものばかりです。又文章で取り扱い方を説明するのも難しく、実際に機械に触れて実習するのが一番手っ取り早い方法かと思います。幸い nifty 社でセミナールームを提供頂けましたので新たに”ＤＯＣＯＫＡＩ”をつくり原則として毎月一回有志が集まり勉強して居る現状です。此方も現在４５名の集まりとなり、既にホームページを持たれて居る方も数名居られ、大変レベルも高くなってきております。

これだけの数の会員でも皆さんコンピューターの使用目的が違います。ホームページ迄いかれた方、積極的にＤＤＤに投稿される方、インターネットを活用されて居る方、メール中心にお使いの方、ＤＤＤは一応見て居られる方、写真・音楽等をやられる方、それ以

活動記録（目次）

Ⅰ　活動報告　（別冊）

Ⅱ　活動記録

目　次